宮城谷昌光

楽毅

上

がつき

海越出版社

中公文庫

果穀

宮城谷昌光

海越出版社

宮城谷　昌光（みやぎたに・まさみつ）

1945年、愛知県蒲郡市に生まれる。デビュー作の「天空の舟」（海越出版社）で新田次郎文学賞受賞。「夏姫春秋」（同）で直木賞受賞。主な作品に「重耳」（講談社）＝芸術選奨受賞＝、「孟嘗君」（同）、「晏子」（新潮社）、「孟夏の太陽」（文藝春秋）がある。

楽毅（がっき）〈上〉

一九九六年二月二十三日　第一刷
一九九六年三月　六　日　第二刷

著　者――宮城谷昌光
発行人――天野作市
発行所――海越出版社
〒461　名古屋市東区葵1の26の12
電話　〇五二・九三五・八四五八（代）
振替口座・00850-8-64920
印刷所――図書印刷株式会社

定価はカバーに表示しています。

©MASAMITSU　MIYAGITANI
1996. Printed in Japan

ISBN4-87697-215-X

落丁本・乱丁本は海越出版社にお送り下さい。
お取り替えします。

楽毅◉もくじ

中山の若人 7
孟嘗君との会見 30
父子の選択 55
魏への使者 79
火と煙 102
胡服騎射 126
蛇の道 150

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黎明の奇襲　173
勝利の謀計　196
四方の敵　219
井陘（せいけい）の塞（とりで）　241
火兵　264
雨中の攻防　287

装幀　西のぼる

楽毅〈上〉

中山の若人

一

——人がみごとに生きることは、むずかしいものだな。

市中の雑踏をながめながら、そんなことを考えているこの青年の心声は、きよらかでありながら勁い。

かなりの身長があるので、人のながれのなかで兀立している感じである。

口もとはひきしまり、目もとはすずしい。

貴人の貌であるが身なりは処士の暗さをもっている。

じつはかれは中山国の宰相の嫡子であり、姓を楽といい、名を毅という。

中山国は河北にある。

東の国境は燕の国に接し、南北と西の国境は趙の国に接している。

はじめに中山国を樹てたのは白狄とよばれる狩猟民族のなかの鮮虞族であるといわれる。中国の北方に散在していた異民族のことは、中華の人々はひとまとめにして狄とよんでいたが、やがてかれらが着ているものの色から、赤狄と白狄とわけるようになった。白狄は大きくわけて三つの族があり、鮮虞のほかに肥と鼓があった。

鮮虞は鮮于ともよばれたが、大勢力を保有するようになったものの、当時、黄河より北の地をほとんど領有していた晋という大国に滅ぼされた。しかしながらその晋が三つに割れた。その三国が、韓、魏、趙である。

つまり晋がそういう分裂をおこすまでに、晋国内で争いがあり、当然、晋の力は国外におよばなくなった。中山も晋の圧力の減退を感じたわけで、地に伏したような勢力を起たせ、翕合させ、晋からはなれて独立することを画策し、実行し、成功した男がいた。その男を、

中山の武公

と、いう。かれが独立国家を創建したのは紀元前四一四年である。

楽毅が生まれるおよそ九十年まえのことである。

創建ということばをつかったのは、それまでの中山国は、国民が定住していたかどうか疑問であったのに、武公のあたりから邑居をさだめ、政府が確立したとおもわれるからである。まさに国家が形成されたのである。

武公は首都を顧においた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その位置は燕との国境に近い。
当時、中華に霸者がいた。
魏の文侯である。
――このまま中山を放置しておけば、中原諸国のわざわいになる。
と、憂慮した文侯は、中山の攻伐を決意した。
征伐軍を中山にむかわせるにあたり、
「なんじが征け」
と、文侯が将に任じたのが楽羊であった。
その楽羊こそ、楽毅の先祖である。
楽羊は勇猛果敢の将軍であり、魏兵はそのころ最強であったにもかかわらず、中山の攻略には三年を要した。
楽羊の子が中山軍に捕獲されたことがあった。楽羊を憎む中山の武公は、
「煮殺せ」
と、命じ、楽羊の子を巨大な鼎の熱湯のなかに沈めると、その湯で羹（スープ）をつくらせ、楽羊のもとにおくりつけた。楽羊は幕下に平然とすわり、その羹を飲みほしたという。
それを知った文侯は、
「楽羊はわしのために自分の子の肉を食べてくれた」

と、喜んだ。ところが覩師賛（とし きん）という臣が、
「自分の子の肉を食べるのですから、たれの肉を食べてもふしぎではありますまい」
と、楽羊をたくみに中傷した。
そのせいで、中山の征服をおえて復命した楽羊の功勲は光をうしなった。
中山を支配下においた文侯は慎重であった。
「たれに治めさせるか」
と、ながながと思案したすえに、
「撃（げき）にまかせよう」
と、きめた。撃は文侯の子で、しかも太子である。文侯は臣下には中山をあたえなかった。異民族の地を治めるのはむずかしい。他民族による羈絆（きはん）をきらう民意を撫で鎮め、一方で威圧するには、臣下の威力ではむりである。公室の直轄地にするしかない。つぎの君主になるはずの撃に中山をまかせたということは、そういうことであった。
それを決定したあと文侯は楽羊をよび、
「なんじに霊寿（れいじゅ）をさずけよう」
と、戦功を賞した。霊寿は中山にある邑のなかでも大きなものである。
これは同時に、太子撃の輔佐に楽羊を任命したことになる。
楽羊はすみやかに霊寿に移住した。以後、かれの子孫は霊寿に住み、楽毅もむろん霊寿で

生まれた。

だが、中山は奇妙な運命をもった国である。

文侯が亡くなり、擊が君主になると、中山を自身で治めているひまはなく、たれかに治めさせなければならなくなった。

擊は死後に武侯とよばれる人である。

かれが即位してまもなく、子の緩を封じたという記録が『竹書紀年』にある。どこに封じたのかわからないが、もしかすると、中山を治めさせようとしたのかもしれない。

ところが魏にとってふつごうなことが生じた。

趙の勢力が拡大したことである。

趙は中牟を首都としていたのだが、そこより北の邯鄲に首都を遷した。つまり趙の首都が中山に近づいたのである。

それにともない趙は、中山と魏をむすぶ地を侵しはじめた。そのこともあって魏は邯鄲を攻めたが、かえって敗れた。

中山と魏は往来しにくくなった。

――中山をどうするか。

と、考えに考えた武侯は、奇抜な着想を得た。魏が中山から手をひけば、陸の孤島になった中山は、あっけなく趙に降るであろう。しかしそこに周王の子をいれたらどうか。趙は容

易に手をだせなくなり、もともと独立心の旺盛な民が住んでいるところだけに、周王の子を奉戴(ほうたい)して、中山を堅持してゆくのではないか。

「それがよい」

さっそく武侯は周王室に申し入れた。

武侯がひきだしたのは王子ではないが、王の弟の子であった。この貴人は中山の桓(かん)公とよばれる。

武侯のねらいはあたった。

中山と魏が杜絶(とぜつ)すると中山は独立色を濃くした。中山が姫(き)姓であるといわれるのは、魏も周王室も姫姓であるからである。中山は魏の支配から脱したが、完全に交流を絶ったわけではなく、友好状態を持続しながら独自の外交をさぐった。

「斉(せい)と結ぶがよい」

ということになった。

斉は趙のむこうにある国である。

趙が中山を欲していることを知っている中山の君臣は、斉と交誼(こうぎ)を成り立たせることで、趙を牽制しようとした。

その交誼の手段というのは、婚姻であった。

斉の公室から中山の公室へ嫁入してもらう。それによって斉と中山の結びつきを強めよう

とした。
事実、斉の公女は中山の公室にはいった。
そのことによって中山は安定を得た。そればかりでなく、国力を増し、堂々たる国家に成長した。
が、富み栄えるということは、慢心を産むことらしい。
外交にひとつの破綻(はたん)が生じた。
楽毅が少年のころに、中山の君主が王を称えた。それが破綻の原因である。
中国の諸侯はそれぞれ爵位をもっており、公、侯、伯、子、男のどれかを周王からさずかっていた。ところが東方の大国である斉の君主が魏の君主をさそって、
「ともに王を称えましょう」
と、きめたことにより、ほかの国の君主もつぎつぎに王を称えはじめた。つまり斉の君主は斉公であったはずが、斉王になった。
それを知った中山公が、
「わしも王になりたい」
と、いいだした。自称するのはかまわないが、諸侯が認めてくれなければ、真の王になれないのである。そこで斉へ使者を立てた。斉王の聴許を得るためである。が、斉王の激怒を買った。

「のぼせあがるな」

と、叱られたようなものである。

しかし中山公はあきらめず、策を弄して燕と趙のゆるしをとりつけて、ついに中山王を称えた。その詐術にひとしい外交を知った斉は、中山との国交を絶った。のちのことをおもえば、中山の君主のつまらぬ欲望が、滅亡への途をひらいたといえなくない。中山は外交の基本を忘れたのである。

二

成人となった楽毅は、中山が斉と国交を断絶したことに困惑をおぼえた。なぜなら、かれは斉で学問をしたかったからである。

「諸子百家」

の時代である。天下に名のきこえた大学者はほとんど斉の首都にあつまっているといってよい。斉の大学者たちは稷門のちかくに住み、大臣なみの待遇をなされているときく。稷門のちかくの繁栄、つまり稷下のにぎわいは、中山にいる楽毅の耳にもとどいている。

「三年の留学でかまいません。斉へゆかせてください」

と、父にくいさがった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.